

# 海外・帰国子女の生涯キャリア発達

—予備報告37: 働くことで得られる母親の自尊心と子育ての意味の世代差—

武 田 圭 太

## 問 題

第二次世界大戦の終戦まで、日本人の日常生活は、個人ではなくイエという家族集団を基礎に慣習化されていた。戸籍つまり親族にかかわる身分関係をはっきりさせるための単位を、戸主が統率する家族で構成される「家」と規定した1898（明治31）年公布の旧民法第4編「親族」および第5編「相続」は、敗戦後の1947（昭和22）年12月に、個人を戸籍の単位とし、家庭生活において男女は平等とする新民法に改められ、1948（昭和23）年1月に施行された<sup>1)</sup>。日本では、敗戦によって民法が改正されイエを単位とした社会秩序が廃止されるまで、個人は家族集団の構成員として存在し、また、その家族集団を構成する男女は不平等に社会統制されていた。

一般に、戦前の農林水産業による暮らしは貧しく、直系家族主義のイエのなかで、女性の地位は低かった。農家の嫁は、田畑の仕事や子育てなどに関して家族への発言力はなく、「角のない牛」と呼ばれ、朝は誰よりも早く起き、夜は誰よりも遅く寝る労働力にすぎなかった（天野，2001, p.7）。そのため、嫁や婿探しのきっかけは、主にイエの労働力不足だったという<sup>2)</sup>。

また、イエに関連する「忠」「孝」の道徳は、親子の情愛より目上の

者に対する目下の者の服従、礼儀、恭順を強調し、夫婦間の愛情の発露を妨げ、「妻は、結婚により夫との深い愛情関係に入るというよりは、夫の家に入り、戸主である舅や、その妻である姑、その子である小姑に仕えることが要求され、夫婦が仲良くするような姿を示すことはかえって好まれなかったのである。そこで、妻はもっぱら子どもに愛情を注ぎ、子どもを生きがいとした。その結果、子どもを自分の私物のように考えるに至り、親子心中など、世界に例が少ないことが多く行なわれた」（星野，1968，pp.273-274）。戸主に服従して、イエのために農作業も家事も育児もする母親は、自己を犠牲に滅私奉公する働き方を体現していたといえよう。そのため、内集団であるイエに関する母親の帰因は、自己概念や自尊心との関連が深いと思われる（村本・山口，1997）。

このように敗戦までの日本では、社会を秩序づけるために法律が家族関係を統制していた。その際、社会秩序を維持するために、イエの構成員それぞれに期待される役割が、夫婦や親子の関係のあるべき姿として定型化され、型通りに役割遂行する義務感が伴っていた。つまり、夫婦や親子は、人間らしい愛情より「孝」の義務で結びついていたと考えることもできるだろう。そのため、夫への愛情が制約される妻は、イエのなかで役割遂行によって得られる報酬を、他の役割に比べて自由裁量度が高い子育てに求め、子どもを育てることに情熱を燃やし、子の成長を実感することを報酬に、役割遂行の達成感と自尊心を保ったのではないかと思われる。例えば、昭和初期の新潟県の農村生活を描写した次のような記述がある（伊藤，1996，pp.21-22）。

「夕食がすむと早速母はくり鉢に黒米粉を入れ、ぬるま湯でこねあげ、明朝の雑炊の団子作りである。また団子かと、喜びもしなかった。大正、昭和の初期までは、子どもは三人から八人はいた。だから小学校には兄弟三人の在校などはいくらもいた。当時は和服であり、祖母や母は薄暗

いランプの下で、子どもの着物の繕いの毎晩であった。昼の重労働の疲れも大きな時代であった。当時の母は家の中心にして、自分をこころして、窮乏な家計の中で精根の限りの子育てであった。……先般ある新聞に『私たち親世代は自分たちはどんなに貧しくても耐えて、すべて子どもにかけて育ててきたように思います。子育ては無償の愛だと言われますが一生懸命育てたわが子に裏切られたら悲しいことです』という記事があった。終戦後の成人式が始まったころだったか記憶はおぼろだが、『はたち』の文集に『母はバカだった』の文を読んだ。しかし、その娘は決して母をばかにしたのではなく、親の切々な苦労をあからさまに記してあって、むしろ非常に感動させられたことを今も思い出す。

今日、民法改正によって夫婦や親子の関係を規制する法律の役割が減退して半世紀以上を経たが、女性が家族のために働くことを肯定する人は、今でも少なくない。内閣府大臣官房政府広報室(2004)が行った「男女共同参画社会に関する世論調査」によると、全国20歳以上の人を母集団として5,000人を層化二段無作為抽出した標本から得たデータ ( $n = 3,502$ ) を集計した結果、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」について、「賛成」(12.7%)、「どちらかといえば賛成」(32.5%)、「女性は結婚したら、自分自身のことより、夫や子どもなど家族を中心に考えて生活したほうがよい」について、「賛成」(17.6%)、「どちらかといえば賛成」(34.7%)となっている。前者の性別役割分業観に関する結果は、当該調査のこれまでの結果と比べて、初めて「反対」が「賛成」を上回ったことで注目されたが僅差である。後者の夫や子ども中心の家族生活観を支持する意見も、同様に時系列としてとらえると漸減しているが、まだ過半を占めている。また、共働き・共稼ぎする女性の実態も、働くことによる自己実現などより経済的動機のほうが強い (Aryee & Luk, 1996; 時子山, 1996)。

このように日本では、今でも戦前と同様に、母親に対して家事や育児など、主として家庭生活の領域で働くように要求する人が多い。さらに、家事や育児ばかりか老親の世話・介護も、もっぱら母親がこなしている（内閣府大臣官房政府広報室，1992）。こうした現状から、戦前のイエに代わって戦後の家庭でも、母親は依然として家族のために自己を犠牲にして働いているようにも思える。母親の家族に対する見かけは利他的な献身に、息子は同情し娘は共感する（武田，2001）。そのため、日本の母子関係、とりわけ母息子は強い感情の絆で結ばれているのが特色とされ、その主な理由は、①母親の明確な社会的役割、つまり子ども、特に男子を生んで母親になること、②息子との同一視による母親の社会的に満たせない成就欲求の代償的満足、③子育てに関する母親のモラル・マゾヒズム傾向が形成する子どもの罪悪感、つまり母親を傷つけて育ったと子どもが抱く罪の観念<sup>3)</sup>と考えられている（原・我妻，1974, pp.197-198）。

従来、自身の社会的な成就欲求を自由に満たせなかった日本の女性は、生むことを要求されて生んだ男子を、世間で立派に成功する優れた男子に育てあげることで代償的満足を得ようと懸命に働いて、生んであげたうえに自己を犠牲にしながら苦労を重ね全てをかけて育てたという態度を示して、無意識のうちに子どもに原罪を意識させ親への報恩を課してきたのかもしれない。そして、子の親への報恩は、例えば、親が老いたときに、子が親を世話し介護する行為の期待となって現れる。実際に、親から離れて暮らしていた子が、老親を世話・介護するために、それほど不満があるわけでもない仕事や都会生活を諦めて、家族を連れふるさとへUターンする人口の還流移動（reverse migration）は、雇用変動にかかわらず常に一定の比率で確認されている（日本人口学会，2002；武田，1993）。

こうしてみると、家族のために働き子育てに生きがいを感じるという価値観は、母親であることの基本として、戦前の親から戦後の子へ少なからず継承されてきたかのように思える。性差以外に、家族内地位がタテに階層化された日本の大家族では、父母や祖父母が子をしつける過程で、父母や祖父母の価値観を基準に子の価値観が社会化されるのかもしれない。ベングツソン（Bengtson, 1975）が示唆したように、歴史的に異なる社会経済状態を背景に、働くことの意味、勤労観、働き方の選択、生きがい、親子の関係、加齢の感情などを、子は家族との相互作用をとおして学習する（武田, 1996, 1997, 2003）。働くことや子育てについて、家族内地位による世代差はあるのだろうか。

また、「家庭にあって男女は平等とする価値観は、どのように実体化しているか?」「男女不平等だった家族集団が、観念ではなく実践として、日常生活の行為をどのように男女平等化してきたか?」「価値観の変遷を経験して、母親は働くことや子育てをどのように認知しているか?」など、日本の女性が働くことに関する疑問は尽きない。

そこで本稿では、働くことや子育てを母親がどのように考えているかについて、年齢集団間で比較し、母親にとっての報酬や意味を検討する。

## 方 法

**調査対象** 調査1の対象者は、愛知県T市営住宅に住む女性144人だった。一般に、既婚女性の就業理由は家計収入に規定されるので、一定の収入基準が入居資格の条件<sup>4)</sup>になっている市営住宅入居者を対象にした。また、調査2の対象者は、祖父母またはそのどちらかと同居している愛知県内の私立A大学文学部、経済学部、国際コミュニケーション学部の学生と、その父母および祖父母465人だった。なお、平均年齢にもとづく対象者の生年は、祖父1926（昭和元）年、祖母1927（昭和2）年、

父1952（昭和27）年、母1955（昭和30）年、男子および女子1982（昭和57）年である。

**調査方法** 調査1は構造化された質問紙を用いた留置法で行い、有効票は106だった（回収率73.61%）。調査2も構造化された質問紙法で行った。調査2については、調査対象の学生を介して、本人だけでなくその父母と祖父母にも回答を要請した。なお、有効票は444だった（回収率95.48%）。

**調査時期** 調査1は2000（平成12）年6～7月、調査2は2001（平成13）年6～7月に行った。

**分析手続** 調査1の対象者のうち本稿では、子どもがいる既婚の女性75人について分析する。

説明変数は、年齢と第一子が小学校に入学する前の就業状態である。年齢は調査時の回答である。一般に、女性の就業率M字型曲線の底は34～35歳なので、出産・育児のため労働市場から離脱する傾向がみられる34歳以下の群（ $n = 29$ ）と、子育てからやや解放され再び労働市場に参入しようとする35歳以上の群（ $n = 46$ ）とに区分した。また、第一子が小学校に入学する前の就業状態は、「子ども（第一子）が小学校に入学する前に、あなたは仕事の経験がありますか」に対して、「1 = 自営業・家族従業者（農林漁業をふくむ）／2 = 勤め人・常用雇用者／3 = 勤め人・臨時、パート、アルバイト／4 = 内職／5 = 無職／6 = その他」のなかから1つ選んでもらって、「2 = 勤め人・常用雇用者」「3 = 勤め人・臨時、パート、アルバイト」をまとめて「有職」群（ $n = 47$ ）とし、「5 = 無職」群（ $n = 28$ ）と比較した。なお、年齢と第一子が小学校に入学する前の就業状態との関係性はない（ $\chi^2 = 4.185$ ,  $df = 1$ ,  $p = .052$ ,  $ns$ ）。

基準変数は、働く母親の子どもへの影響についての意見、親役割についての意見、しつけ方の自信である。働く母親の子どもへの影響につい

ての意見は、表1の20項目（武田，2001）それぞれについて、「第一子が小学校に入学する前に、母親が雇用者（臨時・パート・アルバイトを含む）として働く場合、子どもにどのような影響があると思いますか。次のそれぞれの意見について、『1 = そう思う / 2 = どちらかといえば そう思う / … / 4 = そう思わない』のなかから、あなたのお考えにあてはまる番号に○をつけてください」の回答である。分析は「4 = そう思う / … / 1 = そう思わない」と逆転させて行った。親役割についての意見は、表2の23項目（武田，2001）に対して、「次のそれぞれの意見について、『1 = そう思う / 2 = どちらかといえば そう思う / … / 4 = そう思わない』のなかから、あなたのお考えにあてはまる番号に○をつけてください」の回答である。同様に「4 = そう思う / … / 1 = そう思わない」と逆転させた。しつけ方の自信は、「あなたは、自分の子どもへのしつけ方に自信が持てますか」に対して、「1 = 自信が持てる / … / 4 = 自信が持てない / 5 = よくわからない」のなかから1つ選んでもらった。同様に得点を逆転させて分析したが、「よくわからない」は0点とした。

この他、子どもの性別について、「お子さんはいますか」への回答を、「1 = 子どもはいない / 2 = 息子だけいる / 3 = 娘だけいる / 4 = 息子と娘がいる」のなかから1つ選んでもらった。ただし分析は、「子どもはいない」対象者を除いて行った。

本稿では、調査1で収集したデータを次の2点について分析する。

① 年齢を統制した場合、働く母親の子への影響および親役割について、母親の意見が就業状態によってどのように異なるかについて検討する。

② 働く母親の子への影響および親役割に関する母親の意見に、年齢と就業状態がどのように影響するかについて検討する。

また、調査2のデータについては、性別と家庭内地位を説明変数にする。家庭内地位は、大学生である青年後期の子とその父母、祖父母の3つに区分して、男女差と組み合わせて検討する。

基準変数は、子どもへの献身についての意見、自分のために生きる生き方についての意見、子どもは親の生きがいという考えについての意見、子育ての苦労にかかわる報恩期待についての意見、親の老後のめんどうについての意見である。

子どもへの献身についての意見は、「あなたは、自分自身の欲求は我慢してでも、親は子どものために尽してやるほうが良いと思いますか」に対して、「1 = そう思う / 2 = どちらかといえばそう思う / 3 = どちらかといえばそう思わない / 4 = そう思わない / 5 = よくわからない」のなかから1つ選んでもらい、「4 = そう思う / … / 1 = そう思わない」と逆転させて分析した。ただし、「よくわからない」は0点とした。他の基準変数も同様に処理した。自分のために生きる生き方についての意見は、「あなたは、親は子どものためにではなく、自分自身のために生きるほうが良いと思いますか」、子どもは親の生きがいという考えについての意見は、「あなたは、親にとって子どもは、何より生きがいだと思いますか」、子育ての苦労にかかわる報恩期待についての意見は、「あなたは、親の子育ての苦労は、将来、子どもからめんどうをみてもらって報われると思いますか」、親の老後のめんどうについての意見は、「あなたは、子どもは親の老後のめんどうをみるほうが良いと思いますか」に対するそれぞれの回答だった。この他、調査時の年齢を記入してもらった。

調査2で収集したデータを用いて、本稿では次の2点について分析する。

① 性別や家庭内地位によって、子育てに関する意見にどのような違いがあるかについて検討する。



② 性別を統制した場合、家庭内地位によって、子育てに関する意見にどのような違いがあるかについて検討する。

## 結 果

**働く母親の子への影響** 表1によると、全体では、「11. 母親が仕事でソトに出るから、子どもは、母親をとおして世間を知るようになる」が1%水準の有意差を示し、第一子が小学校入学前に有職の母親のほうがより支持した。

年齢別にみると、母親が35歳以上の場合、5%水準で有意差がみられ、第一子が就学前に有職の母親のほうが、「11. 母親が仕事でソトに出るから、子どもは、母親をとおして世間を知るようになる」と考えているのに対して、無職の母親は、「12. 仕事が忙しく母親の気持ちにゆとりがなくなると、子どもは親の顔色をうかがうようになる」と思っている。一方、母親が34歳以下の場合、どの項目にも有意差はみられなかった。

第一子が就学前に母親が働くことを肯定視する意見として、実際に就業していた母親は、仕事でソトに出る母親に誘導されて、子が家庭のソトを認知するようになる効果をあげた。他方、母親が多忙で気持ちのゆとりがなくなることの子への悪影響のような働くことを否定視する意見は、実際に就業していなかった母親に支持された。

**親役割** 表2によると、全体では1%水準で有意差がみられ、第一子が小学校入学前に無職の母親に比べ有職の母親は、「11. 母親が働くことは、母親と娘との感情的な結びつきを強める」「22. 働く母親は、実際には父親よりも家族の大黒柱になっている」と思っている。母親がソトで働くことに帰因する身体的・精神的な状態について、母娘は互いに理解し合えると母親は思っているようである。

年齢別では、母親が34歳以下の場合、1%水準で有意差がみられ、第

表1 働く母親の子への影響に関する既婚女性の認知

	全 体 (n=75)				～34歳 (n=29)				35歳～ (n=46)			
	有職 (n=47)		無職 (n=28)		有職 (n=14)		無職 (n=15)		有職 (n=33)		無職 (n=13)	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
年齢	38.70	7.52	35.96	10.14	30.36	3.13	28.27	2.66	42.24	5.83	44.85	7.98
1.働いている母親は子どもに干渉しすぎないため、子どもの自立心が育つ。	2.43	1.02	2.04	.96	2.43	1.02	2.13	.92	2.42	1.03	1.92	1.04
2.母親の働く姿を見て、子どもは仕事の大切さを知る。	2.68	1.00	2.36	1.10	2.79	1.05	2.47	.83	2.64	.99	2.23	1.36
3.子どもが小学生になるまでは、母親が働くことで子どもに寂しい思いをさせないほうが良い。	2.96	1.22	3.25	1.00	2.57	1.40	3.27	.70	3.12	1.11	3.23	1.30
4.「夫はソトで働き、妻はウチで家事をする」という結婚形態を、子どもは好まなくなる。	1.87	1.03	1.82	.94	1.79	.98	1.80	.86	1.91	1.07	1.85	1.07
5.子どものために働いているという母親の感情が、子どもに負い目を感じさせることがある。	2.02	1.07	2.07	1.05	2.00	1.04	1.87	.74	2.03	1.10	2.31	1.32
6.仕事に疲れた母親の様子を見て、子どもは悲哀を感じる。	2.11	.98	2.11	.88	2.14	1.03	2.07	.88	2.09	.98	2.15	.90
7.母親が熱心に仕事にとりくむ姿勢を、子どもは誇りに思う。	2.94	.89	2.54	.92	3.07	.83	2.47	.83	2.88	.93	2.62	1.04
8.仕事を終え帰宅して家事をする母親にたいして、子どもはその労苦に思を感じる。	2.19	.97	1.93	.86	2.07	1.00	2.07	.80	2.24	.97	1.77	.93
9.仕事が忙しいときは、母親は子どもの悩みに気づかないことが多い。	2.91	1.08	2.93	.98	2.64	1.01	2.60	.91	3.03	1.10	3.31	.95
10.母親が仕事で家にいないので、家族のあいだに必要な最小限の会話以外は交流がない。	1.81	.97	2.04	1.07	1.71	.83	2.00	1.00	1.85	1.03	2.08	1.19
11.母親が仕事でソトに出るから、子どもは、母親をおして世間を知るようになる。	2.47	.93	1.86	.85**	2.36	.84	1.87	.92	2.52	.97	1.85	.80*
12.仕事が忙しく母親の気持ちにゆとりがなくなると、子どもは親の顔をうかがうようになる。	2.87	1.01	3.32	.86	3.07	.92	3.20	.86	2.79	1.05	3.46	.88*
13.母親の仕事が忙しくして帰宅が遅くなると、食事など家族の生活時間が乱れがちになる。	3.09	.90	3.18	1.06	3.21	.70	3.13	1.13	3.03	.98	3.23	1.01
14.母親が働いているので、子どもは家事を分担してやるようになる。	2.77	.87	2.39	1.10	2.86	.77	2.60	.91	2.73	.91	2.15	1.28
15.仕事と家事・育児とが重なってイライラした母親が、子どもに八当たりすることがある。	3.15	.86	3.39	.74	3.21	.98	3.33	.62	3.12	.82	3.46	.88
16.母親が働くことで、子どもの自立心が養われるとはかぎらない。	3.04	1.04	3.11	.96	3.00	1.11	3.07	.88	3.06	1.03	3.15	1.07
17.子どもと過ごす時間が短い働く母親は、つい子どもを甘やかすのでしつけが行き届かない。	2.00	.93	2.04	1.00	1.86	.95	1.87	.83	2.06	.93	2.23	1.17
18.仕事で疲れた母親にたいして、子どもはあまりわがままを言えず我慢することを学ぶ。	2.45	.88	2.18	.94	2.36	.93	2.07	.70	2.48	.87	2.31	1.18
19.働いているあいだ母親は家にいないので、子どもは自由で気楽にいられる。	2.19	.92	2.18	1.12	2.00	.96	2.00	.93	2.27	.91	2.38	1.33
20.仕事とおした社会への貢献について、子どもは父親より母親から多くを学ぶ。	2.21	1.04	2.04	1.04	2.43	1.16	1.93	.80	2.12	.99	2.15	1.28

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$

海外・帰国子女の生涯キャリア発達

表2 親役割に関する既婚女性の認知

	全 体 (n=75)				～34歳 (n=29)				35歳～ (n=46)			
	有職 (n=47)		無職 (n=28)		有職 (n=14)		無職 (n=15)		有職 (n=33)		無職 (n=13)	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
1.夫婦の共働きは、家事や育児など家庭生活の負担が重くなるので良くない。	1.94	1.01	1.93	.94	2.07	1.14	1.80	.56	1.88	.96	2.08	1.26
2.将来、娘は家事や育児に専念し、息子は仕事主体に助むように育てるほうが良い。	1.68	.96	1.64	.78	1.79	1.25	1.53	.52	1.64	.82	1.77	1.01
3.自分自身の欲求は我慢してでも、親は子どものためにつくしてやるほうが良い。	2.15	.83	2.25	.93	2.07	.73	2.27	.70	2.18	.88	2.23	1.17
4.ゆとりのある家計収入でも、女性は無職のほうが良い。	2.45	1.08	2.14	.93	1.93	1.07	2.07	.70	2.67	1.02	2.23	1.17
5.かりに子どもが望むなら、母親は仕事をやめたほうが良い。	2.81	1.12	3.18	.77	2.86	1.10	3.00	.76	2.79	1.14	3.38	.77
6.親にとって子どもは、何よりも生きがいである。	3.28	.85	3.00	1.09	3.00	.96	3.07	1.03	3.39	.79	2.92	1.19
7.息子にたいしては、母親はできるだけ働かないで、息子の世話をするほうが良い。	1.47	.65	1.57	.69	1.21	.43	1.80	.68*	1.58	.71	1.31	.63
8.母親が働いている家庭では、息子より娘は家事を手伝うほうが良い。	1.81	.92	1.71	.76	1.86	1.17	1.73	.59	1.79	.82	1.69	.95
9.働く妻は、内心では夫に気兼ねしている。	2.00	1.08	1.68	.90	2.36	1.15	1.87	.99	1.85	1.03	1.46	.78
10.親は、子どもの成長にもっとも喜びを感じる。	3.64	.53	3.43	.79	3.50	.65	3.33	.90	3.70	.47	3.54	.66
11.母親が働くことは、母親と娘との感情的な結びつきを強める。	2.34	1.01	1.71	.81**	2.29	.99	1.80	.78	2.36	1.03	1.62	.87*
12.親は、できるだけ親の考えるように子どもにさせたほうが良い。	1.53	.72	1.57	.88	1.29	.47	1.40	.63	1.64	.78	1.77	1.09
13.女性にとっては、仕事で成功するよりも良い妻であり母であるほうが幸福である。	2.45	1.00	2.64	1.03	2.64	1.08	2.73	.96	2.36	.96	2.54	1.13
14.子育ての苦労は、将来、子どもからめんどろをみてもらって報われる。	1.47	.78	1.29	.66	1.21	.58	1.27	.46	1.58	.83	1.31	.86
15.娘にたいしては、母親はできるだけ働かないで、娘の世話をするほうが良い。	1.47	.65	1.64	.73	1.21	.43	1.80	.68*	1.58	.71	1.46	.78
16.家庭では、父親がすべて取り仕切るほうが良い。	1.64	.76	1.43	.69	1.71	.61	1.60	.83	1.61	.83	1.23	.44
17.男性と同様に女性も、責任のある地位でリーダーとして重要な仕事を遂行できる。	3.26	.92	2.89	1.03	2.93	1.14	3.20	.78	3.39	.79	2.54	1.20*
18.親は、子どものためではなく、自分自身のために生きるほうが良い。	2.64	.82	2.46	1.10	2.79	.80	2.80	1.08	2.58	.83	2.08	1.04
19.夫は、妻が働くことで負い目を感じている。	1.55	.77	1.54	.74	1.71	.91	1.80	.86	1.48	.71	1.23	.44
20.子育てにかかわる伝統や習慣は、尊重するほうが良い。	2.57	.85	2.46	.96	2.79	.58	2.13	.52**	2.48	.94	2.85	1.21
21.母親が働くことは、母親と息子との感情的な結びつきを強める。	2.04	.91	1.71	.81	1.93	1.00	1.67	.62	2.09	.88	1.77	1.01
22.働く母親は、実際には父親よりも家族の大黒柱になっている。	2.02	1.09	1.36	.68**	1.93	1.27	1.60	.83	2.06	1.03	1.08	.28**
23.子どもは、親の老後のめんどろをみるほうが良い。	2.06	.87	1.93	.94	1.86	.86	1.93	.88	2.15	.87	1.92	1.04

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$

一子が就学前に有職の母親は、「20. 子育てにかかわる伝統や習慣は、尊重するほうが良い」と思っている。また、「7. 息子にたいしては、母親はできるだけ働かないで、息子の世話をするほうが良い」「15. 娘にたいしては、母親はできるだけ働かないで、娘の世話をするほうが良い」について5%水準の有意差がみられ、第一子が就学前に無職の母親のほうが、どちらもより肯定した。

他方、35歳以上についても、1%水準で有意差がみられ、有職の母親のほうが、「22. 働く母親は、実際には父親よりも家族の大黒柱になっている」と考えている。さらに、5%水準でも有意差がみられ、「11. 母親が働くことは、母親と娘との感情的な結びつきを強める」「17. 男性と同様に女性も、責任のある地位でリーダーとして重要な仕事を遂行できる」について、いずれも有職の母親のほうが支持した。

家庭の内外で働く母親に共感する娘との母娘関係は、家族の基盤を支える役割を母親との相互作用から学習し、家族集団内で母親であることに向けた娘の社会化に関する実情を表しているといえよう。また、母親が34歳以下の場合、第一子が就学前に有職の母親は、無職の母親に比べ子育てには保守的であるようにみえるが、それは育児の伝統や習慣を軽視せず仕事と両立させようという考えだと思う。そうした見方は、無職の母親 ( $n = 15, M = 1.07, SD = .96$ ) より有職の母親 ( $n = 14, M = 2.00, SD = 1.04$ ) のほうが、子どものしつけ方に自信を持っている ( $t = 1.878, df = 73, p < .05$ ) ことからもうかがえる。なお、子どものしつけ方について、全体および母親が35歳以上の場合には、有職と無職の母親の間に有意差はなかった。

一方、無職の母親は、できるだけソトで働かないで、息子や娘の世話をしたほうが良いと考えているが、両者の違いは、35歳以上になったときの自尊心に現れている。つまり、有職の母親は、家庭のウチでは家族

の大黒柱として、また、家庭のソトでも責任のある地位でリーダーとして重要な仕事を遂行できるという有能感をより強く自覚している。

**年齢と就業経験の影響** 第一子が小学校に入学する前の母親の就業経験の有無と、母親が働くことの子への影響および親役割に関する認知との関係が、母親の年齢によって差異がみられるかについて二元配置分散分析を行った。その結果、「11. 母親が仕事でソトに出るから、子どもは、母親をとおして世間を知るようになる」への就業経験の主効果 ( $F(1,71) = 6.608, p < .05$ )、「17. 男性と同様に女性も、責任のある地位でリーダーとして重要な仕事を遂行できる」への就業経験と年齢との交互作用効果 ( $F(1,71) = 5.886, p < .05$ )、「22. 働く母親は、実際には父親よりも家族の大黒柱になっている」への就業経験の主効果 ( $F(1,71) = 7.629, p < .01$ ) が認められた。

第一子が小学校に入学する前から働いている母親は、年齢にかかわらず働くことが子どもの社会化に有効と考え (図1)、また、父親より家族の大黒柱になっていると自負している (図2)。さらに、男性と同様に女性も、責任ある地位でリーダーとして重要な仕事を遂行できるという母親の認知は、34歳以下では第一子が小学校入学前の就業経験の有無による有意差はみられなかったが、35歳以上になると、有職だった母親のほうが高得点を示した (図3)。

このように、子育てに多くの時間を費やす就学前の時期に働いている母親は、家庭内外の仕事を遂行できるという経験に裏付けられた自尊心を得て、働くことの子への好影響を確信しているようである。特に、有職の場合、男性と同様にリーダーとして重要な仕事を遂行できるという自信は、35歳以上になると以前より高まるが、無職では逆に低下する。これは、子育てと仕事とを両立させる緊張状況を克服した成果と思われる。

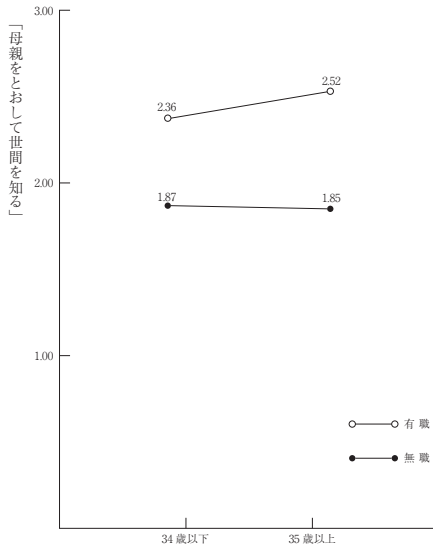


図1 「母親をとおして世間を知る」への就業経験の主効果

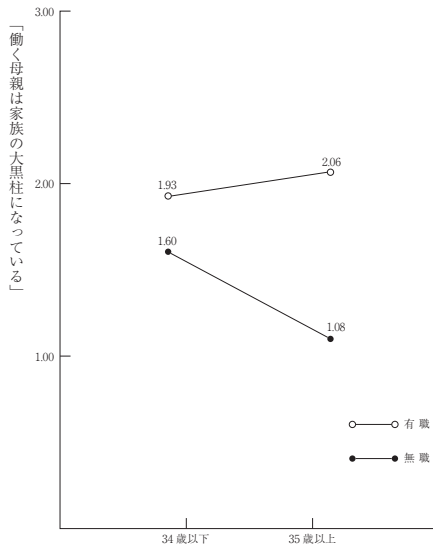


図2 「働く母親は家族の大黒柱になっている」への就業経験の主効果

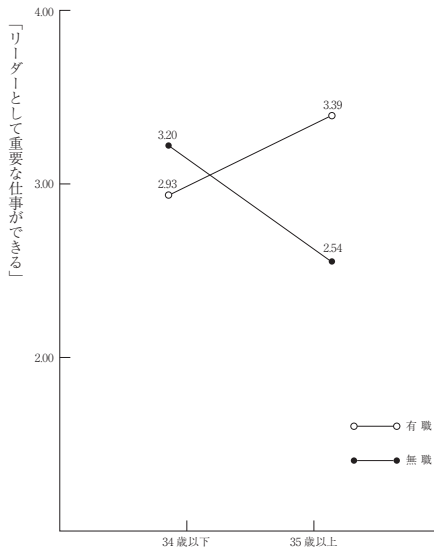


図3 「リーダーとして重要な仕事ができる」への就業経験と年齢の交互作用

子育てに関する認知 子育ては母親が家庭のソトで働くことを制限し、さまざまな障害をひき起こすので、母親は仕事と子への愛情との板挟みのなかで、仕事をしたい利己心と、子どもを構いたい利他心との葛藤を経験すると思われる。そのような思いで育てた子に対して、母親は何を期待するのか。子育ては親にとってどのような意味があるのか。また、子育ての考え方に性差や世代差はあるか。このような子育てに関する基本的な考えが、三世代が同居し家庭生活の諸条件を共有する大家族の構成員にどのようにみられるかについて、家庭内地位にもとづく世代差を一元配置分散分析した結果、男女共に有意差が認められた(表3)。

まず、女性のデータを最小有意差法とテューキー法で多重比較したところ、女子および母親と祖母との間に、「1. 子どもへの献身」「3. 子どもは親の生きがい」について0.1%水準の有意差、また、「4. 子育ての

表3 男女別にみた子育てに関する認知の世代差

	男 性 (n=197)						女 性 (n=247)					
	男子 (n=54)		父親 (n=98)		祖父 (n=45)		女子 (n=74)		母親 (n=91)		祖母 (n=82)	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
年齢	19.48	.82	49.87	2.87	75.53	5.78***	19.23	.77	46.73	3.31	74.01	5.47***
1. あなたは、自分自身の欲求は我慢してでも、親は子どものためにつくしてやるほうが良いと思いますか。	2.22	1.24	2.45	1.03	3.22	.95***	2.03	1.03	2.31	.99	2.90	1.04***
2. あなたは、親は子どものためではなく、自分自身のために生きるほうが良いと思いますか。	1.76	1.16	2.33	1.15	2.09	1.24*	2.00	1.12	2.32	.89	2.06	1.23
3. あなたは、親にとって子どもは、何より生きがいだと思いますか。	2.65	1.25	2.54	1.22	3.31	.93**	2.61	1.06	2.74	1.03	3.44	.74***
4. あなたは、親の子育ての苦労は、将来、子どもからめんどうをみてもらって報われると思いますか。	2.20	1.20	1.48	.82	2.49	1.01***	1.96	1.01	1.43	.82	2.24	1.21***
5. あなたは、子どもは親の老後のめんどうをみるほうが良いと思いますか。	2.94	1.12	2.42	1.13	3.09	.97**	3.05	.86	2.16	1.21	2.85	1.08***

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

「苦労の報恩期待」について女子と母親との間に1%水準の有意差、同じく母親と祖母との間に0.1%水準の有意差、さらに、「5. 親の老後のめんどう」について女子および祖母と母親との間に0.1%水準の有意差がみられた。

子育ての苦労の報恩期待について、母親の意見は三世代のうちで最も否定的である。親の老後のめんどうをみることもあまり肯定していない。他方、子どもに献身し子どもを生きがいとする価値観は、祖母が最も高かった。また、女子は、子どもに献身し子どもを生きがいとする価値観を積極的に支持していないが、子育ての苦労の報恩や、特に親の老後のめんどうについては母親より肯定している。多世代の家族集団のなかで生活する母親への娘の気遣いだろうか。

次に、男性の多重比較の結果から、「1. 子どもへの献身」について男子および父親と祖父との間に0.1%水準の有意差、「3. 子どもは親の生



きがい」について男子と祖父との間に5%水準の有意差、同じく父親と祖父との間に1%水準の有意差、「4. 子育ての苦勞の報恩期待」について男子および祖父と父親との間に0.1%水準の有意差、「5. 親の老後のめんどう」について男子と父親との間に5%水準の有意差、同じく父親と祖父との間に1%水準の有意差がみられた。また、女性では三世代間に差異がなかった「2. 自分自身のために生きる生き方」について、男子と父親との間に5%水準の有意差がみられた。

女性と同様に、子どもへの献身を生きがいとする価値観は、祖父の支持が最も強い。子育ての苦勞の報恩期待や老後のめんどうについて、母親と同じように父親も否定視しているが、息子は父親より肯定的である。それに男子は、親は子どものためにではなく、自分自身のために生きるほうが良いという意見をあまり支持していない。これが息子の親への要求なのか、自身が父親になったときの心積もりなのかははっきりしないが、やがては自分自身も一家の主として家族を扶養する役割を負うという認知によるのかもしれない。

子どもの性別にみた子育てに関する認知 家庭内地位の違いを統制して、三世代を個別に比較した結果、表3の年齢を除く5項目について男女間の違いはなかった。つまり、子育ての認知について、男子と女子、父親と母親、祖父と祖母それぞれの間に男女差はない。そこで、性差と世代差以外に、子育てに関係する他の主要因である子どもの性別を基準に、男子、女子、男女子の3群について、まず、父母と祖父母の二世代内で男女別に一元配置分散分析した。その結果、祖父母には、子どもの性別による差異はみられなかったが、父母の世代では、母親は「1. 子どもへの献身」、父親は「2. 自分自身のために生きる生き方」について5%水準の有意差が認められた(表4)。

多重比較の結果、母親の子どもへの献身は、息子と娘とで5%水準の

表4 世代別にみた子育てに関する認知の子どもの性別による差異

	父親 (n=98)						母親 (n=91)					
	男子 (n=22)		女子 (n=25)		男女子 (n=51)		男子 (n=17)		女子 (n=22)		男女子 (n=52)	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
年齢	49.55	3.29	50.56	2.38	49.67	2.89	47.06	3.44	47.32	3.29	46.37	3.30
1. あなたは、自分自身の欲求は我慢してでも、親は子どものためにつくしてやるほうが良いと思いますか。	2.27	1.32	2.32	1.11	2.59	.83	1.88	.99	2.68	.78	2.29	1.02*
2. あなたは、親は子どものためではなく、自分自身のために生きるほうが良いと思いますか。	2.41	1.14	1.84	1.21	2.53	1.07*	2.29	.99	2.09	.75	2.42	.92
3. あなたは、親にとって子どもは、何より生きがいですか。	2.23	1.19	2.80	1.19	2.55	1.24	2.59	1.28	3.05	.65	2.65	1.06
4. あなたは、親の子育ての苦労は、将来、子どもからめんどろをみてもらって報われると思いますか。	1.50	.80	1.44	.87	1.49	.81	1.12	.60	1.50	.80	1.50	.87
5. あなたは、子どもは親の老後のめんどうをみるほうが良いと思いますか。	2.18	1.10	2.44	1.19	2.51	1.12	1.65	1.12	2.27	1.35	2.29	1.16

\* $p < .05$

有意差がみられた。また、娘がいる父親と、息子と娘がいる父親とでは、自分のために生きる生き方に5%水準の有意差がみられた。母親は、息子に比べて娘には、自身の欲求を我慢して尽そうとする強い思いを抱いている。父親にも、娘には息子と違う気持ちがあるようで、娘がいると、子どものためではなく自分自身のために生きる利己心が、あまり強く現れていない。父母共に、息子より娘を思いやる気持ちが強いようである。

このように、父母の世代には子どもの性別によって微妙な差異がみられたので、次に、子どもの性別を統制して、父母と祖父母の世代差を男女別に検討した。表5と表6から、子どもが同性ではなく異性、つまり息子と娘の場合、二世代間の違いがより明確になった。二世代間の差異は、前述した表3の特徴とほぼ一致している。父母の世代は、加齢の過程で男女の格差を是正しようとする第二次世界大戦後の価値観を経験しているが、祖父母の世代は、男子と女子の育て方がはっきり区別された

海外・帰国子女の生涯キャリア発達

表5 子どもの性別にみた子育てに関する男性の認知の世代差

	男 子				女 子				男女子			
	父親 (n=22)		祖母 (n=12)		父親 (n=25)		祖母 (n=8)		父親 (n=51)		祖母 (n=25)	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
年齢	49.55	3.29	77.08	3.99***	50.56	2.38	75.38	2.67***	49.67	2.89	74.84	7.08***
1. あなたは、自分自身の欲求は我慢しても、親は子どものためにつくしてやるほうが良いと思いますか。	2.27	1.32	2.83	1.19	2.32	1.11	3.38	.52*	2.59	.83	3.36	.91***
2. あなたは、親は子どものためではなく、自分自身のために生きるほうが良いと思いますか。	2.41	1.14	1.83	.94	1.84	1.21	2.25	1.49	2.53	1.07	2.16	1.31
3. あなたは、親にとって子どもは、何より生きがいだと思いますか。	2.23	1.19	2.92	1.08	2.80	1.19	3.63	.52*	2.55	1.24	3.40	.91**
4. あなたは、親の子育ての苦労は、将来、子どもからめんどろをみてもらって報われると思いますか。	1.50	.80	2.17	.84*	1.44	.87	2.75	1.04**	1.49	.81	2.56	1.08***
5. あなたは、子どもは親の老後のめんどろをみるほうが良いと思いますか。	2.18	1.10	2.92	.67*	2.44	1.19	3.00	1.31	2.51	1.12	3.20	1.00*

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

表6 子どもの性別にみた子育てに関する女性の認知の世代差

	男 子				女 子				男女子			
	母親 (n=17)		祖母 (n=20)		母親 (n=22)		祖母 (n=13)		母親 (n=52)		祖母 (n=49)	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
年齢	47.06	3.44	74.25	4.48***	47.32	3.29	71.23	8.23***	46.37	3.30	74.65	4.81***
1. あなたは、自分自身の欲求は我慢しても、親は子どものためにつくしてやるほうが良いと思いますか。	1.88	.99	2.95	.83**	2.68	.78	3.15	.80	2.29	1.02	2.82	1.17*
2. あなたは、親は子どものためではなく、自分自身のために生きるほうが良いと思いますか。	2.29	.99	2.15	1.14	2.09	.75	2.31	1.25	2.42	.92	1.96	1.27*
3. あなたは、親にとって子どもは、何より生きがいだと思いますか。	2.59	1.28	3.30	.66*	3.05	.65	3.62	.51*	2.65	1.06	3.45	.82***
4. あなたは、親の子育ての苦労は、将来、子どもからめんどろをみてもらって報われると思いますか。	1.12	.60	1.85	1.35*	1.50	.80	2.31	1.11*	1.50	.87	2.39	1.17***
5. あなたは、子どもは親の老後のめんどろをみるほうが良いと思いますか。	1.65	1.12	2.75	1.21**	2.27	1.35	3.23	.73*	2.29	1.16	2.80	1.10*

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

社会環境下ですごした時間が長い。そのため、息子と娘を育てた祖父母は、両性の子育て経験による男女の違いを確かに内化していると思われる。

子育ての認知は子どもの性別でやや世代差がみられるので、相互の関係を明らかにするために二元配置分散分析を行った。その結果、男女共に「1. 子どもへの献身」(男性は  $F(1,137) = 16.074, p < .001$ ; 女性は  $F(1,167) = 15.764, p < .001$ )、「3. 子どもは親の生きがい」(男性は  $F(1,137) = 12.374, p < .01$ ; 女性は  $F(1,167) = 19.521, p < .001$ )、「4. 子育ての苦労の報恩期待」(男性は  $F(1,137) = 33.397, p < .001$ ; 女性は  $F(1,167) = 20.982, p < .001$ )、「5. 親の老後のめんどう」(男性は  $F(1,137) = 9.366, p < .01$ ; 女性は  $F(1,167) = 18.579, p < .001$ )について有意差がみられ、いずれも世代差の主効果だけが認められた。したがって、育てる親および育てられる子の性差より、世代によって子育ての意味は異なると考えられる。

## 考 察

家計収入を一定水準以下に統制して、女性が出産・育児のために働くことを休止する年齢と考えられている34～35歳前後で、働くことの意味や報酬について母親の意見を比較した結果、第一子が就学前から働いていた母親は、35歳を超えて子育ての繁忙期を乗り越え少しずつ解放される年齢になると、働くことの子どもへの好影響を確信し、子育てだけでなく仕事もできるという自尊心の高揚を感じている。働く母親が考えているような子どもへの好ましい影響は、実際に子どもの成長を追跡しないと検証できないが、仕事か子育てどちらかのキャリアより両方に従事する母親のほうが、キャリアの充足感は高いと思われる。これは、人生を自己統御し楽しみや喜びを感じている心理的に幸福な女性とそうでない女性とを差異化するのには、前者の有職と後者の無職との違いであると

指摘したバルクとバーネットの報告 (Baruch & Barnett, 1986) とも矛盾しない。仕事だけで子育てにあまり関与しない父親より、働きながら子育てもする母親のほうが豊かなキャリアを形成しているのかもしれない。

原調査1では、収入格差による就業理由の違いをできるだけ解消するため、一定の収入基準を条件にして対象者を選定した。当該対象者の総収入金額の高低は、T市内の全世帯の収入構成に位置づけてみないと判明しないが、母親が働くことに関して収入基準をある程度は統制した結果として、働くことの母親自身にとっての意味や報酬を考える手がかりが得られたことは意義があると思う。本稿の分析から、およそ34~35歳まで子どもや家族のために働くという利他性が、仕事と家庭とを両立させようと試行錯誤させ母親の自己成長を促進するといえよう。

こうした献身的な行為を、母親が自己犠牲と感じるかが問題であるが、子どもが成長し子育ての成否が実感される頃の親子関係をとおして、子どもの成長が母親に子育ての達成感や充足感を認知させる場合、自己犠牲の思いは相殺され、母親はそれまでの献身を肯定視できるのだろう。つまり、母親は子どもが育つまで子育ての報酬を得られないし、その報酬を得るためには良好な親子関係を築くことも求められる。

子どもや家族のために自己を犠牲にする母親は、自分自身の欲求や希望や夢などにあまり関心がないという指摘がある (Rubenstein, 1998)。野波 (1993) は、集団内で少ない報酬しか得ていない少数者 (minority) の行動は集団構成員に影響すると報告したが、その際、少数者の行動が、報酬志向ではなく自身の信念や態度にもとづいていると帰因されることが条件と考えられた。外在する報酬を得るために母親が犠牲を払っているとは思えないから、母親は自身の欲求や希望や夢より子どもや家族のために働いていると、他の家族構成員が認知する場合、母親は家族構成員に影響力を持つ。

しかし、子育てに関する母親の自己犠牲について、例えば、人間の生涯発達のような長い時間幅で見直すと、子育て中やその直後とは違った考えを思い抱く人も少なくないだろう。つまり、子育てのように報酬を得るまで時間がかかる行為の犠牲を評定するには、子育ての成果の多面性ばかりでなく継時的な意味の可変性にも注意する必要があると考えられる。意図した自己利益追求のためではなく純粋な利他的行動が、結局は自己利益につながる可能性も指摘されている（高橋・山岸, 1996）。

また、子育ての考え方は、子どもの成長に応じて変化するだけでなく、世代による違いもみられる。幼児に対するアメリカ人のしつけ観は、社会の経済状況や時代精神によって変化してきたという（Eyer, 1992）。過去の日本にも、母親の自己犠牲を助長する国家政策下で、子育てが行われていた時代があった。原調査2の対象者のうち祖父母にあたる人たちは、国家のために子が戦死する名誉を報酬とし、自己を犠牲にして子どもを育てた親の子である。子育てにまつわる祖父母の屈折した利他性が、親であることの父母の思いや考えに影響しているかもしれない。父母は、祖父母が準拠する男女不平等や滅私奉公などの価値観に反発しながらも、育ててもらった報恩の気持ちを拭えないのではないか。父母は、「人情」つまり祖父母の立場で気持ちを考え共感して、「義理」つまり祖父母の期待に応え立派な良い子の役割を遂行しようとするだろう。北山・唐澤（1995）は、役割志向性つまり「義理」と、情緒的態度つまり「人情」との融合が、日本人の相互協調の理想と指摘した。敗戦前後の相反する価値をどちらも理解する父母は、家族のなかで自己を抑圧しがちではないかと思われる。

そうした祖父母と父母との親子関係を共有する男女子は、父母の葛藤を認知しているように思える。特に、祖父母の世話や介護をする母親に、娘は共感しているだろう。将来、娘が結婚して子どもが生まれ母になり、

娘の母が祖母になると、家族集団内に今と同じような女性の世代間連鎖が再形成され、子育てを機軸に仕事と家庭とを両立させるための相互扶助関係が引き続き機能すると推察される。このような女性の家族内世代間連鎖は、子育ての報酬や返報を次世代に先送りするという合理性で成立するので、各世代の時代背景が異なっても維持されるだけの普遍性を持つのではないかと考えられる。

## 註

- 1) 星野(1968, pp.266-270)は、民法旧規定における「家」を次のように説明している。「家」は、家督相続によって引き継がれていく戸主権を持つ戸主が統率する家族集団である。その特色は、①すべての国民は、必ずある「家」に属し、家長である戸主か家族構成員かの身分に分かれること、②「家」は、觀念的に多くの構成員を含みうる同じ氏の集団で、「家」の出入には戸主の同意が必要であり、戸主は祖先の系譜、祭具、墳墓の所有権を前戸主から承継し、「家」の統一性と継続性を象徴したこと、③戸主は、「家」を空間的・時間的に維持し存続させるために、戸主権という強い権能を持ち、家族構成員を扶養する義務を負うが、戸主権を行使して家族構成員の居所を指定したり、婚姻や養子縁組に同意したり、所有者があいまいな「家」の財産を所有できたりしたこと、④「家」の継続・維持をはかるために、戸主権は特殊な相続対象として家督相続が行われ、通常は長男が家督相続人になり、前戸主に属した「家」の財産を単独相続したこと、⑤「家」においては、例えば、家督相続は男性が優位、夫による妻の財産管理、婚姻による準禁治産者とほぼ同じ地位にあたる妻の無能力者化、姦通に関する妻の不利、親権つまり子の肉体的精神的財産的なめんどうをみる権利義務は「家」を同じくする父が持つのが原則、婚姻外で認知した夫の子つまり庶子と妻とは親子に準じた関係など、男性に対して女性が劣位だったことである。
- 2) こうした実情に関しては、民俗学や歴史学などが多くの業績を残しているが、日常生活の行動様式や生活慣習を記した一般人の文書から読み解くこともできる。例えば、新潟県西蒲原郡吉田町で、明治から大正、昭和、平成にかけて農業に従事している伊藤(1996, pp.43-44)が、越後吉田町農協の組合だよりに連載した思い出話を編集し刊行した『えちごののうから明治が語る』には、次のような記述がある。「昔はよく年頃になったからとの言葉もあったが、それより嫁、婿さがしのきっかけは、家庭の労働力の不足が第一の条件で、親

は長男の了解よりも親の独断で『ニギリメシ背に草鞋がけ』。親はまた家の固めをつけるのが親の責任と一生懸命な時代であった。だから嫁は、馬、牛、同様だなどと悪評もあったが、当時の若者達はそんなに不思議な言葉とも思わなかった。他村からの縁談が持ちかかると、親は慎重にその村まで行き、家の状況、相手方の素性など調べてくるという厳格さもあった。親達は人間は働きさえすれば、米のめしと、おてんとうさまはついて廻ると言って、子どものときからただ労働本位に育ててきたものである。

女達は相手が真面目に働く人でさえあれば、一生食ってゆけると信じ、一度も会ったことも、見たことがなくとも親の言葉に従っての結婚であった。当時あった堪忍、忍耐、従順などの言葉からもわかるように、その実行を強いられて来たのが明治、大正の人達である。こんな状況下の嫁がしだから、家庭の親が年老いておるとか、片親しか生存して居ない家庭では殊更に、若いうちから結婚させられた。嫁にやると親達の一番の心配は、一日も早くその家風になじむことであり、それが願いであった。だから自分の性格、考え方よりも、嫁いだ家の風習に見習って忠実に働くことが重要とされていたのである」。

3) 原・我妻(1974, pp.170-179)は、戦前の日本の母親の多くにモラル・マゾヒズムの傾向があり、母親の傷つきは、子どもにとって特別の意味を持ち、子どもに罪悪感を覚えさせやすい事情があったと主張している。モラル・マゾヒズムは、自分を殺したり、痛めつけることによって、相手のなかに罪悪感をひき起こし、それによって相手の気持ちを変えさせ、相手の行動を自分の思うがままに動かす影響力と説明されている。例えば、いうことをきかない子どもに、「そういうことをしたらお母さんが困るのだよ」という態度を陰に陽に示したり、悪いことをした子どもの眼前で、「お前の監督が悪いからだ」と父親が母親を叱りつけ、母親が傷つく姿を実際に子どもに見せたりして、子どもにいうことをきかせるような行為にあたる。

また、戦前の修身教育の主題であった親の恩の教えについても、モラル・マゾヒズムの態度が指摘されている。つまり、子どもを育てるのに親がさんざん心配し苦勞するということを強調して、自分が育つ過程が、そのまま親が苦勞し傷つく過程と、子どもに自覚させ罪悪感から逃れられないようにしているという見方である。

4) 原調査1を行った2000(平成12)年時の愛知県T市市管住宅への入居条件は、①市内在住・在勤の人、②同居の親族(婚約者を含む)がいる人、または単身者で次の要件のいずれかに該当する人(50歳以上、身体障害者1～4級、戦傷病者、原爆被爆者、海外から5年以内の引揚者、生活保護者、ハンセン病療養所入所者など。ただし、単身者で身体上または精神上著しい障害があるために常時介護を必要とし、かつ居宅においてこれを受けることができず、ま



たは受けることが困難であると認められる人は除く)、③持ち家がなく現在住宅に困っている人、④次の収入基準以下の人となっている。

総収入金額による収入基準 (円)						
	単身者	2人家族	3人家族	4人家族	5人家族	6人家族
一般	3,675,999	4,151,999	4,627,999	5,103,999	5,575,999	6,051,999
裁量	4,695,999	5,171,999	5,647,999	6,123,999	6,595,999	7,017,778

(注) 裁量には、障害者のいる世帯、家族全員が50歳以上の世帯などが該当する。  
また、源泉徴収票では支払金額が総収入金額になる。

## 引用文献

- 天野寛子 2001 『戦後日本の女性農業者の地位－男女平等の生活文化の創造へ－』 ドメス出版。
- Aryee, S., & Luk, V. 1996 Work and nonwork influences on the career satisfaction of dual-earner couples. *Journal of Vocational Behavior*, 49, 38-52.
- Baruch, G.K., & Barnett, R. 1986 Role quality, multiple role involvement, and psychological well-being in midlife women. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51 (3), 578-585.
- Bengtson, V.L. 1975 Generation and family effects in value socialization. *American Sociological Review*, 40, 358-371.
- Eyer, D.E. 1992 *Mother-infant bonding: A scientific fiction*. New Haven: Yale University Press. (大日向雅美・大日向史子 訳 2000 『母性愛神話のまぼろし』 大修館書店)
- 原ひろ子・我妻 洋 1974 『しつけ ふおるく叢書1』 弘文堂
- 星野英一 1968 『「家」から家庭へ－民法における家族の変遷－』 大河内一男 編 『東京大学公開講座11「家」』 東京大学出版会 pp.259-286.
- 伊藤甲子 1996 『えちごののうかから明治が語る』 近藤アルバム印刷
- 北山 忍・唐澤真弓 1995 「自己：文化心理学的視座」『実験社会心理学研究』, 35(2), 133-163.
- Lerner, H. 1998 *The mother dance: How children change your life*. New York: Harper Collins. (高石恭子 訳 2001 『女性が母親になるとき－あなたの人生を子どもがどう変えるか－』 誠信書房)
- 村本由紀子・山口 勲 1997 「もうひとつの self-serving bias: 日本人の帰属における自己卑下・集団奉仕傾向の共存とその意味について」『実験社会心理学研

- 究』, 37(1), 65-75.
- 内閣府大臣官房政府広報室 1992 「男女平等に関する世論調査」
- 内閣府大臣官房政府広報室 2004 「男女共同参画社会に関する世論調査」
- 日本人口学会 編 2002 『人口大事典』 培風館
- 野波 寛 1993 「自己犠牲的行動スタイルをとるマイナリティが個人の順態度的行動に及ぼす効果」『実験社会心理学研究』, 33(1), 31-40.
- 小此木啓吾・北山 修 2001 『阿闍世コンプレックス』 創元社
- Rubenstein, C. 1998 *The sacrificial mother: Escaping the trap of self-denial*. New York: Lowenstein Associates. (神崎康子 訳 1998 『愛しすぎる母親たちー子どものために自己犠牲化する女性ー』 主婦の友社)
- 高橋伸幸・山岸俊男 1996 「利他的行動の社会関係的基盤」『実験社会心理学研究』, 36(1), 1-11.
- 武田圭太 1993 『生涯キャリア発達－職業生涯の転機と移行の連鎖－』 日本労働研究機構
- 武田圭太 1996 「母親の仕事経験と青年後期の子が望む女性の働き方との関係(1)」『産業・組織心理学会第12回大会発表論文集』, 36-38.
- 武田圭太 1997 「母親の仕事経験と青年後期の子が望む女性の働き方との関係(2)」『産業・組織心理学会第13回大会発表論文集』, 75-77.
- 武田圭太 2001 「母親が働くことに影響される子どもの共感」『産業・組織心理学研究』, 14(2), 79-95.
- 武田圭太 2003 「母親の仕事経験と青年後期の子が望む女性の働き方との関係(8)」『産業・組織心理学会第19回大会発表論文集』, 152-155.
- 時子山ひろみ 1996 「共働き世帯の家計構造」『生活の設計』, 184, 21-26.